

続くようにも見えるが、この部分の墳丘が変形していること、南側面に同様な緩斜面がみあたらないことを考えると、やはりテラスの存在は認めがたい。

南側面では前方部正面の斜面中腹の緩斜面に相当するかと疑われる緩斜面が帯状に広い範囲で認められた。しかし、正面の緩斜面とは接続しないし、後円部に近づくにつれてレベルが低くなるなど、この緩斜面をテラスと考えるには難がある。

したがって、前方部側面ではテラスの存在を示す徴証は得られなかった。むしろ本来なかったと考えるべきであろうか。

#### 四 括れ部

括れ部付近にはかつての里道が切り通し状に通っており、このため原状が大きく変更されているが、後円部と前方部との接合部にはほとんど影響はないようである。

括れ部上面は、前方部頂部の平坦部から、そのまま広い緩やかなスロップがおりてきていったん平坦になった後、後円部第四段上面に向かって徐々に傾斜を急にしながら上昇する。

括れ部側面では後円部第一段と第三段上面の緩斜面（テラス）が途切れてしまい、前方部側面に接続する状況は観察されなかった。

（笠野 毅、土生田純之）

#### 河内大塚陵墓参考地のヘドロ調査

当参考地の周濠のうち東池と西池は、入水口部にあたる南東側のヘドロ堆積が激しく、半ば陸化している。従って将来このヘドロを浚渫するためには、その堆積量を把握しておく必要がある。そこで昭和六十三年二月二十三日から三月五日まで、該地に計15本のトレンチを設定して調査した（第12図）。

土層は比較的単純で、以下の通りである（第12図13外堤上の第13トレンチを除く）。

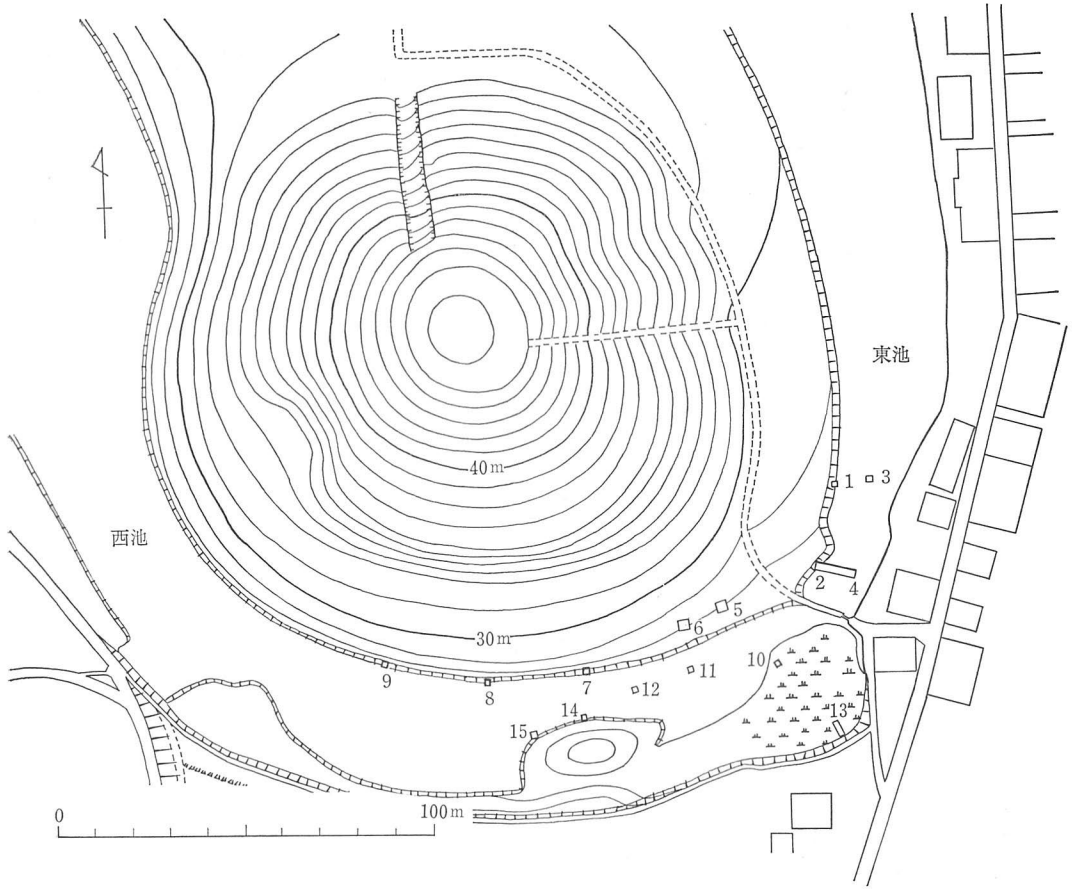
I層 表土（ヘドロ）。

II層 黄白色ないし青灰色の粘土（砂）層。

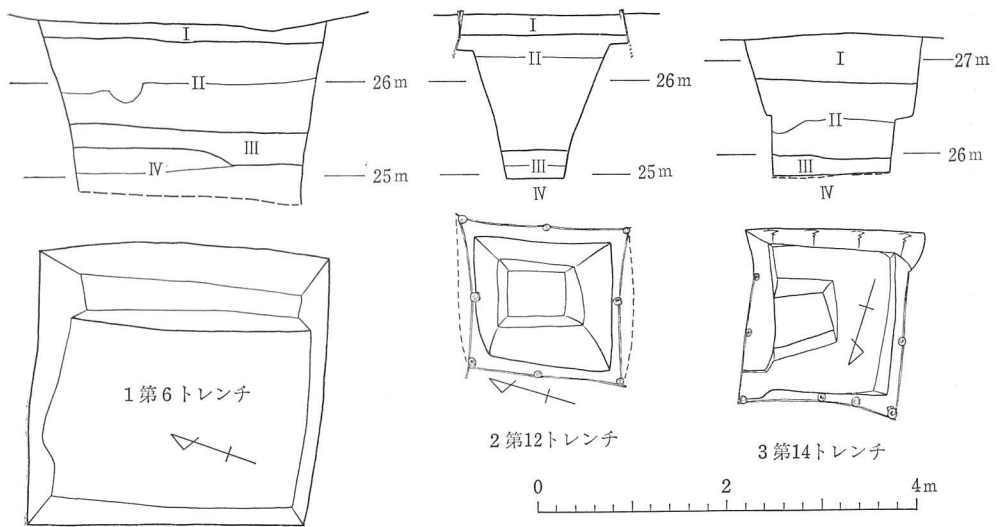
III層 褐色系の粘土層（ただし第1・3・7・9・10トレンチにはない）。

IV層 青灰色ないし褐色の粘土層。

このうちIV層は、一部で深掘りしたところ下方程固くなり、層内にまじり気はなかった。また遺物を全く包含していない。従って、本層はいわゆる地山と判断してさしつかえない。III層はよく締まっており、原初の周濠内堆積層の可能性を考えたが、第14トレンチで古代・近世の土器や瓦が出土した。しかし他のトレンチでは遺物はなかったため、第14トレンチ以外のIII層については、原初の堆積層である可能性もわずかに残



第12図 大塚陵墓参考地調査箇所的位置 (1/2000)



第13図 大塚陵墓参考地トレンチ平面および断面 (1/80)

る。ただし、当参考地の周濠はかつて「ため池」として使用されており、幾度も浚渫されたものと思われる。これらことから、原初の堆積層は既に失われたものとも思われる。

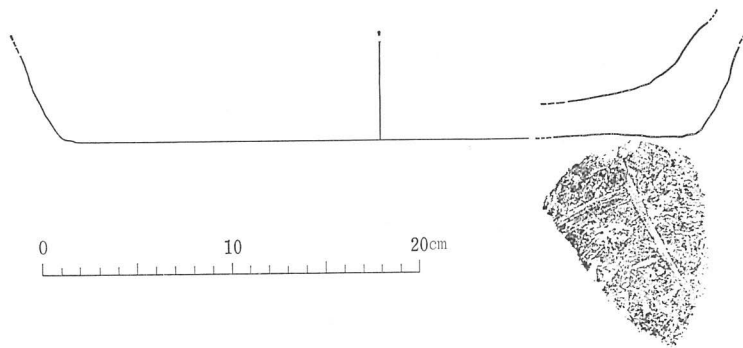
ところで、地表からIV層上面までは、いずれのトレンチも極めて浅く、最も深い第10トレンチでさえわずかに約二メートルにすぎない。全長三〇〇メートルを越す大型前方後円墳にしては、相当に浅いものといえる。あるいは原初の外堤は現状よりかなり高く、既に削平されたのであろうか。外堤上に設定した第13トレンチは表土直下が地山で、上記の想定のように既に削平されたか、もともと極めて浅い濠であったかのいずれかであらう。

II層には近・現代の遺物を多く含んでおり、近代以降の新しい堆積であらう。

なおIII層のみられなかったトレンチのうち第7・9トレンチでは、II層中に褐色系の粘土がブロック状に点在しており、本来は調査地全体にIII層が堆積していた可能性が強い。

以上から、将来の浚渫については、III層以下に及ばないように注意する必要がある。

最後に墳丘の南方、西池中に存在する中島状の高まりについて述べておこう。この高まりに接する第14・15トレンチの観察によれば、IV層が高まりに向かって上昇する気配はなかった。また第14トレンチのIII層からは既述のように近世のものを含む遺物が出土しており、I・II層もブ



第14図 大塚陵墓参考地の出土品 (1/4)

ロック状に数種の土が混在していた。従って、高まりの中心部に小規模の墳丘を想定しない限り、この高まりの性格は、西池浚渫の土砂を盛り上げたものであると判断できよう。

遺物はほとんどが近・現代のものである。第14図は第14トレンチIII層出土の炆器で、大甕の底部である。同層中から他に土師器甕の頸部や燻瓦の小片が出土している。

(土生田純之)